



中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の 実態と原因 : イメージ・スキーマの観点から

李, 文鑫

(Citation)

Learner Corpus Studies in Asia and the World, 3:263-276

(Issue Date)

2018-03-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81010131>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010131>



中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態と原因

—イメージ・スキーマの観点から—

李 文鑫(筑波大学・大学院生)

liwenxin415@gmail.com

The Study of the Collocation Errors Committed by Chinese Learners of Japanese and Their Causes—Perspectives on Image Schema—

LI Wenxin (University of Tsukuba, Graduate Student)

概要

本研究では中国語話者⁽¹⁾の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態と原因を探るために、大型学習者コーパスの中で学習者の自然産出文を対象に、形態素分析の手法を用いて分析を行った。その結果、学習者は母語話者の自然産出のデータと同じ傾向を示し、形容詞「強い」「深い」「高い」「大きい」の産出量は他の形容詞より多いことがわかった。さらに、 χ^2 検定の結果により、中国語を母語とする日本語学習者が産出している形容詞「深い」「小さい」の頻度は、日本語母語話者や、韓国語、英語を母語とする学習者と比べて多く、実質的な差が見られた。また、日本語母語話者の修正データに関しては、共起によりコロケーションの誤用(*能力が強い→高い)が見られる。すなわち、「深い」の誤用の68%は「強い」に修正され、「小さい」の誤用の81%は「小さな」に修正されている。そして、「深い」「強い」と思考、感情を表す名詞との共起関係を調べたところ、日本語では「強い」の使用が好まれるのに対して、中国語では「深」の使用が好まれるということが明らかになった。それは<思考><感情>メタファーに関して、日本語では、<力>スキーマによって動機づけられているが、中国語では、<容器>スキーマによって動機付けられていることが原因と考えられる。学習者の誤用は母語の直訳と非直訳の両方に現れ、誤用の原因は日中両言語のイメージ・スキーマのズレによることが明らかになった。

キーワード

コロケーション、誤用、イメージ・スキーマ、日中対照、概念メタファー

1. はじめに

第二言語習得理論は、1940～1950年代の「対照研究仮説(Contrastive Analysis Hypothesis, CAH)」(Lado, 1957)を始めとして、幾つかの変遷を経てきた。その流れの中で、他分野の研究からの影響を強く受けている。

対照研究仮説(CAH)では、学習者の誤用はすべて母語によって引き起こされるという考えに基づいている。そのため、学習者の誤用が問題視されて、できるだけなくす方向に研究者が努力してきた。Dulay and Burt(1972)では、過剰一般化(overgeneralization)現象が言及され、誤用の原因は母語の影響ではなく、学習者が習得したルールを、そのルールが適用できない部分にも当

てはめて使用していることに指摘された。さらに、Corder(1967)は、学習者の誤りを敵視してではなく、誤りは学習が進んでいる証しであるとポジティブに捉えている。そして、第二言語習得理論は「誤用分析」(Error Analysis, EA)に展開した。

Schachter(1974)は、学習者が自信のない学習者項目の使用を回避する傾向があることを指摘し、誤用だけでは学習者の習得状況を把握することができないと主張した。その後、学習者の誤用だけではなく、正用を含めて学習者の使う言語の全体像を研究する「中間言語仮説」(Interlanguage Hypothesis, ILH)へ発展した。Selinker(1972)は、学習者の中間言語(IL)は母語(NL)、目標言語(TL)と異なり、独自の言語体系を持っていることを主張した。Selinkerの中間言語理論はその後盛んに研究されているが、学習者の誤用を分析する際に、直接的にNLに結びつく場合、誤用の原因は母語の負転移と結論づけられ、NLで説明できない場合、学習者のILであると片付けられる傾向がある。

第二言語習得研究においては、学習者のデータと母語話者のデータの比較はよくある研究方法である。しかし、大規模データの収集が難しく、データの入力・処理には時間がかかるといった難点があるため、学習者の中間言語の全体像を把握することは容易ではなかった。近年、様々な学習者コーパスの構築と公開に伴い、対照中間言語分析(Contrastive Interlanguage Analysis, CIA)やコンピュータ支援による誤用分析(Computer-aided Error Analysis, CEA)といった手法を援用した研究が盛んに行われるようになった(大関, 2017)。

迫田(1998)では、対照研究を基盤とした誤用分析的な研究が、誤用の原因や習得方略の解明へと展開されると述べられている。上記の研究では、短絡的に誤用の原因を母語干渉だと決めつけるという点が問題であることが指摘されている。また、迫田(1998)では、母語干渉の可能性を証明するためには、1カ国の言語話者の調査のみで言及するのではなく、正と負の転移を考慮すると、少なくとも3カ国以上の言語話者のデータによって判断されることが必要であると示されている。コーパスの構築と公開によって、データの取集が簡単になったが、多くの研究は収集されたデータの結果を報告するだけで、理論研究へと結びつかないという問題点があると指摘された。

本研究は中国語話者の日本語の形容詞コロケーションの誤用の実態を明らかにするために、中国語話者のデータと日本語母語話者のデータを比べるだけでなく、異なる母語(英語、韓国語)の学習者のデータも研究対象とする。さらに、学習者の誤用の原因をイメージ・スキーマの観点から考察し、形容詞コロケーション産出の違いを引き起こす日中両言語の深層構造の違いを明かにすることを目的とする。

2. 先行研究

コロケーションは語群、連語、語結合とも呼ばれ、主に語と語の結びつきを指している。本稿では、中村(2011)の定義を援用し、コロケーションを「複数の異なった品詞からなる、意味的まとまりをもつ語彙の結束単位」として扱う。近年、コロケーションによる語彙指導は、単語の意味による語彙指導と比較すると、目標語及び共起語を同時に指導することで、事後テストの成績が高いと示されるようになった。すなわち、コロケーションによる語彙指導法は語彙の記憶に効果があることが検証さ

れた(三好, 2007)。しかし, コロケーションは学習者の語彙習得を促す効果があると指摘される一方で, コロケーション自体の習得が難しいと言われている。小森他(2012)は中国人日本語学習者を対象に, 日中同形語(同義語, 異義語, 類義語)のコロケーションの習得状況を調査した。その結果, 中国語と同じ共起語がとれない語については, 日本語能力1級以上の学習者でもコロケーションの習得が進んでいないと報告され, 母語の知識の転用がコロケーションの誤用を引き起こす要因であると述べられている。

形容詞コロケーションに関する誤用研究は, 曹・仁科(2006a; 2006b; 2007)の一連の研究が挙げられる。曹・仁科(2006a)は, 中国人日本語学習者の作文から形容詞と形容動詞を含む共起表現 934 件を抽出し, 分析を行った。その結果, 誤用を起こす形容詞は一部の初級レベルの属性形容詞に集中していることが明らかになった。曹・仁科(2006a)では, 調査総数が限られているため, 一つの形容詞に関して現れる誤用例が少なく, そのため, 誤用原因を探ることが困難であった。

また曹・仁科(2006b)は, 日本語母語話者と学習者が産出した表現の異同を調査し, 学習者の誤用を分類している。調査方法は 70 の名詞を刺激語として, その前後に空欄を設けて, 被験者にできるだけ多く記入するように指示している。

例 1: あし(足)が ____。() () ()

例 2: ____おさけ(お酒) () () ()

その結果, 学習者より母語話者の方が産出した表現数が多いことが分かった。曹・仁科(2006b)では, 学習者の誤用を A「共起」(例: *大きい雨), B「造語」(例: *毒い薬, C「漢字の過剰生成」(例: *粗い木), D「文化・文学関係」(例: *黄色い秋), E「品詞の誤り」(例: *充実な秋, F「『的』語の誤り」(例: *希望的な春), G「使用制限」(例: *多い雨)に分けている。全ての誤用(530)の中で, 「共起」の誤用は全体の 43%を占めている。曹・仁科(2006b)で挙げられている誤用例からみれば, A「共起」以外の誤用タイプの中で, C の「*粗い木」, D の「*黄色い秋」も「共起」の誤用にまどめることができる。つまり, 「共起」のような語と語の結びつきは, 学習者にとって最も誤用しやすいタイプだと言える。

曹・仁科(2006b)は中国人学習者の誤用の種類を明らかにしたが, 刺激語という研究方法を用いるため, 完全な自由産出とは言えない。なぜなら, このような方法は前後の文脈がないため, 刺激語を見て, 母語で連想したコロケーションをそのまま目標言語に直訳する可能性が高いからである。そのため, 自由産出の中に現れているコロケーションの誤用の傾向を見るべきである。

李(2014)では, 自由産出の中に現れている「名詞+動詞」のコロケーションを分析し, 特に「直訳」(全ての誤用のうち, 60%を占める)は誤用を引き起こす要因の 1 つであることが検証されている。これらの研究から, 中国人日本語学習者にとって, 「共起」のような語と語の結びつきが一番習得しにくいことが示唆され, 母語の「直訳」は学習者の誤用を引き起こす大きな要因であることが明らかになった。確かに日本語と中国語は似たような漢字が多く, 学習者は母語の語形, 音韻, 意味的, 統語的知識を利用し, 目標言語のコロケーションを習得していくと考えられる。しかし, このよ

うな原因指摘は、どのように学習者にコロケーションを教えればいいのか、という教育上への示唆にはつながらない。また、「非直訳」、すなわち母語にない語と語の結びつきの誤りの原因が見落とされがちで、安易に学習者の中間言語に片付けられる現状もある。

本研究は曹・仁科(2006a;2006b;2007)の研究結果を踏まえ、CIAの手法を用いて、属性形容詞の共起の誤用を中心に、学習者の自由産出のデータと母語話者データを比較し、また、母語が異なる学習者のデータを比べ、中国語話者の学習者が産出する日本語の形容詞コロケーションの特徴、誤用原因を明らかにする。さらに、本稿では、母語の負転移には表層構造(直訳)だけでなく、深層構造(イメージ・スキーマ)の負転移があると主張する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的とRQ

本研究では中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態と原因を探るために、中国語話者以外に、学習者コーパスで自由産出文が最も多い、英語話者と韓国語話者の自由産出文を比較することに²⁾する。具体的に以下の3つの研究課題を設定する。

RQ1: 中国語話者(CH)と日本語母語話者(JP)、英語話者(EG)、韓国語話者(KO)の自由産出文を比べると、日本語の形容詞の使用傾向にはどのような違いが見られるのか。

RQ2: 中国語を母語とする日本語学習者の形容詞コロケーションの誤用には、どのような傾向があるのか。

RQ3: 中国語を母語とする日本語学習者の形容詞コロケーションの誤用の原因は何か。

3.2 データ

分析データとして、日本語母語話者の自然産出データを日本語のウェブサイトから収集して構築した約11億語のコーパス「筑波ウェブコーパス」(以下、TWC)を利用する。また、学習者の誤用原因を探るために、中国語の自然産出データとして「北京大学 CCL 語料庫」(以下、CCL)を利用する。

学習者の自然産出データは Lang-8 のデータから作成された Lang-8 Corpus of Learner Japanese v1.0(以下、Lang-8 学習者コーパス)を利用する。Lang-8 は相互添削型 SNS とも言われ、2011年10月の時点で77の言語をサポートし、317,307のユーザーが登録している(水本他, 2013)。Lang-8 学習者コーパスの特徴として、以下の3点がある。①従来の学習者コーパスより規模が大きい。②Lang-8 のユーザー情報から学習者の母語がわかる。③学習者の作文とその添削文のペアを簡単に手に入れることができること。しかし、1文に対して複数の添削があり、また、修正不完全な場合もある。よって、本研究は以下の①～⑤に沿ってデータを処理する。

処理手順:

① Lang-8 学習者コーパスから、中国語(CH)、韓国語(KO)、英語(EG)を母語とする学習者の自由産出文を選び、母語ごとにファイルにまとめ、重複を削除したものを分析データとする。

② 統計ソフト R を使い、パッケージ RMeCab(0.97)の関数 RMeCabFreq()を使って形態素分析を行い、中国語(CH)、韓国語(KO)、英語(EG)を母語とする学習者の自由産出文の総語数及び形容詞頻度を集計する。分析データの内訳は表1に示す。

表1 分析データ

	中国語を母語とする学習者(CH)	韓国語を母語とする学習者(KO)	英語を母語とする学習者(EG)
総語数	4,689,333	651,794	5,825,214
16 形容詞の総語数	11,104	1,177	10,542

③ 中国語(CH)を母語とする学習者の誤用データから、形容詞の「語幹+い」「語幹+く」「語幹+か」の形で、「深い、浅い、大きい、小さい、強い、弱い、高い、低い、重い、軽い、濃い、厚い、薄い、淡い、明るい、暗い」の16個の形容詞を含む文を抽出し、母語話者に修正してもらった。

④ 3人の母語話者に、形容詞を含んだ文(同じ文)を修正してもらった。修正文数が多いため、修正箇所は形容詞及び、形容詞と係り受けの関係を持つ部分のみに限定する。本研究では、曹・仁科(2006b)が扱っている形容詞の終止用法(*能力が強い)、連体用法(*強い能力)だけでなく、学習者の誤用傾向を探るために、形容詞及び、形容詞と係り受けの関係を持つ部分が離れている場合も修正を行ってもらった。

作例:*日本人の学習力は驚くほど強い。(下線は修正箇所である)

⑤ 3人の母語話者のうち、1人(以上)の人が修正を行なった場合、不自然なコロケーションとして扱う。2人(以上)が同じに修正を行った場合、誤用コロケーションとして判定する。その修正結果を修正語とする。

作例:*協力が強い(修正1:協力が高い;修正2:協調性がある)→不自然なコロケーション

作例:*競争が強い(修正1:競争が激しい;修正2:競争が激しい)→誤用コロケーション

4. 結果と分析

4.1 RQ1 中国語話者と日本語母語話者、英語話者、韓国語話者の自由産出文を比べると、日本語の形容詞の使用傾向にはどのような違いが見られるのか

中国語話者の日本語学習者の形容詞の自由産出の傾向を調べるために、Lang-8 学習者コーパスから CH, KO, EG の自由産出文を収集し、TWC から日本語母語話者(JP)のデータを抽出した。総語数は一億語に統一し、16の形容詞の出現頻度を比べた。その結果、異なる母語の日本語学習者と日本語母語話者の各形容詞の産出はほぼ同じ傾向を示した(図1)。また、自然産出の形容詞の中で、「強い」「深い」「高い」「大きい」は他の形容詞より多く産出していることがわかった。このような傾向は母語話者(JP)だけでなく、学習者の CH, KO, EG のデータからもうかがえる。

また、図1によると、CH は、JP, KO, EG より「強い」「深い」「小さい」の産出量が多い。次に、 χ^2 検定(1×j 行)を用いて、「強い」「深い」「小さい」において CH, KO, EG, JP の産出頻度が差異が

あるかどうかを分析し、多重比較し、適合度効果量(w)を測った(表 2)。効果量の評価は竹内・水本(2014)の基準を参考し、0.5(大), 03(中), 01(小)とする。

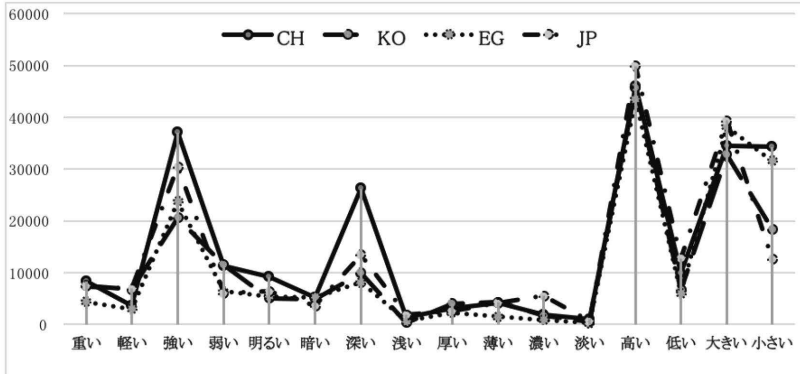


図 1 CH, KO, EG, JP の形容詞産出量(1億語換算)

表 2 異なる母語話者の日本語形容詞の産出頻度の差

	度数 (1億語換算)	$\chi^2(3)$ 確率(p)	効果量(w)	多重比較 (ライアンの名義水準)	効果量(w)
強い	CH=37118	5809.11 p<.01	0.23	CH>KO, p<.01	0.29
	KO=20558			CH>EG, p<.01	0.22
	EG=23763			CH>JP, p<.01	0.10
	JP=30456				
深い	CH=26309	14006.56 p<.01	0.49	CH>KO, p<.01	0.45
	KO=9972			CH>EG, p<.01	0.53
	EG=8070			CH>JP, p<.01	0.32
	JP=13449				
小さい	CH=34304	13376.03 p<.01	0.37	CH>KO, p<.01	0.30
	KO=18410			CH>EG, p<.01	0.04
	EG=31593			CH>JP, p<.01	0.46
	JP=12629				

表 2 より、「強い」の CH, KO, EG, JP の産出頻度を比べた結果、 $\chi^2(3)=5809.11, p<.01$ で産出頻度には有意差が認められた。効果量が小さいので、実質的な差が小さいことがわかる。多重比較の結果では、CH と JP において、効果量が小さく、実質的な差があるとは言えない。次に、

「深い」の CH, KO, EG, JP の産出頻度を比べた結果、 $\chi^2(3)=14006.56$, $p<.01$ で産出頻度には有意差が認められた。効果量が 0.5 に近いことで、実質的な差が大きいことがわかる。多重比較の結果では、CHとJPにおいて、効果量が中程度で、実質的な差があると言える。「小さい」の CH, KO, EG, JP の産出頻度を比べた結果、 $\chi^2(3)=13376.03$, $p<.01$ で産出頻度には有意差が認められた。効果量が中程度で、実質的な差がある。また、多重比較で分析した結果、CH と JP において、効果量が大きいので、実質的な差があることが分かった。

以上の結果から、「深い」「小さい」において、CH, KO, EG, JP の産出頻度には実質的な差があることがわかった。また、中国語話者は日本語母語話者より、この 2 つの形容詞において過剰使用していることが明らかになった。次節では、母語話者の修正データに基づき、「深い」「小さい」はそれぞれどんな名詞とよく共起しているか、誤用傾向を探る。

4.2 RQ2 中国語を母語とする日本語学習者の誤用には、どのような傾向があるのか。

4.1 の結果からわかるように、中国語を母語とする日本語学習者は形容詞「深い」「小さい」の産出量が母語話者より多く、それは使うべきではないところに過剰使用したと予想できる。続いて、母語話者の修正データに基づき、「深い」「小さい」形容詞正誤判断の頻度を集計し、表 3 に示す。表 3 から分かるように、「深い」の産出数 1237 例のうち、不自然なコロケーションは 151 例で、誤用コロケーションは 86 例である。修正語に使う形容詞は最も多いのは「強い」で、全部 59 例、全体の 68%を占める。日本語の「深い」は中国語の「深」の中心義と同じで、基準になる面から底までの距離が長いことを表している。しかし、拡張義がずれるため、自然産出において、差異が見られると思われる。本研究の結果から、中国語の「深」の拡張義と日本語の「強い」の拡張義は重なる部分があることがわかった。

表 3 誤用形容詞コロケーションの頻度

	産出数	不自然なコロケーション	誤用コロケーション	修正語 1 位	修正数(%)
深い	1237	151	86	強い	59(68%)
小さい	1527	123	97	小さな	79(81%)

「小さい」では、修正語の中で「小さな」に修正されたコロケーションが最も多く、97 例のうち 79 例があり、全体の 81%を占めている。具体的な誤用コロケーションの形式を見ると、そのうち、「*小さい」19 例、「*小さいの」3 例、「*小さいな」75 例がある。学習者は「小さい」「小さいの」「小さいな」「小さな」の間で揺れていることがうかがわれる。

4.3 RQ3 中国語を母語とする日本語学習者の形容詞コロケーションの誤用原因は何か

4.3.1 「深い」の誤用傾向

表 3 では、学習者が産出した「深い」の誤用コロケーションの中で、86 例のうちの 59 例が「強い」に修正されている。「深い」のコロケーションが、どのような名詞と共起して使用しているかを調べるために、ワードクラウドで図式化する。ワードクラウドは単語の出現頻度に応じて、図式化する手法である。色、字体、向きに変化をつけることができるが、本研究では、文字の向きをランダムに設定し、大きさだけは頻度の高さを意味している。まず、「深い」をキーワードに、キーワードの前後の 5 語を単位として、「強い」と係り受けの関係を持つ名詞を調べる。次に、頻度 3 以上の名詞を図式化し、図 2 に示す。主な名詞の産出量は印象(44)、私(37)、興味(27)、影響(21)、心(20)、中(13)、一番(12)、人(12)、日本(11)、意味(10)、感動(10)である。



図 2 「深い」と共起する名詞

図 2 より、学習者は「印象、理解、意味、記憶」の思考類名詞、「興味、感動、感情、気持ち」といった感情類名詞の程度を表すとき、「深い」をよく使用することが分かる。また、他者や相手に対する影響の強さを表すとき、「深い」が頻繁に使われている。

これらの名詞(印象、興味、影響、意義、感動、了解、記憶、理解、イメージ、感情、気持ち)をターゲット語(T)として、それぞれ中国語と日本語において、<深>と<強>のどちらと共起しやすいかを明らかにするために、CCL と TWC を使用し、中国語では、“很深的+T”、“T+深刻”、

“深刻的+T”、“深深地+T”と“T+强烈”“强烈的+T”“很强的+T”の頻度を調べ、日本語では、「深い+T」「T+が深い」と「強い+T」「T+が強い」の頻度を調べた。その結果を図 3、4 に示した。

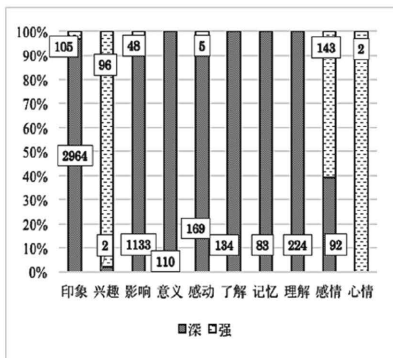


図 3 中国語の“深”“強”と共起する名詞

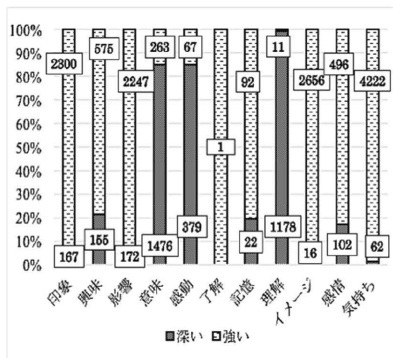


図 4 日本語の「深い」「強い」と共起する名詞

これまで述べてきたように、「小さな」(79例)に修正された学習者の誤用の形式においてほとんど「*小さいな」(75例)であり、学習者は形容詞「小さい」から徐々に連体詞「小さな」を習得していくと考えられる。つまり「*小さいな」は学習者が習得途上に現れた中間言語の形式なのではないだろうか。中国人学習者による「形容詞+の+名詞」の接続の間違いはよく指摘されるが、本研究のデータによると、形式に似ている連体詞「小さな」がある場合、「小さい+な+名詞」の間違が多いことがわかる。また、このような現象は「大きい」の誤用コロケーションからも観察されており、誤用コロケーションの137例のうち、「大きい+な+名詞」の間違いは60例も見られるのである。

5. 考察

4節では、「深い」、「小さい」の誤用傾向を分析した結果、「小さい」の誤用の原因は学習者の母語に対応する形容詞“小”の意味によるものではなく、主に連体詞「小さな」を習得していく過程において現れた誤用だと分かった。一方、「深い」の誤用は中国語に対応する形容詞“深”の意味から強く影響を受け、語選択において誤用が現れている。しかし、なぜ中国語において、思考、感情の強さを表す時、“深”が用いられるかについては論じていない。本節では、概念メタファー理論に基づき、その動機付けについて考察する。

山梨(2000)は、我々の日常言語の概念構造は、空間認知、運動感覚などに関わる具体的な身体経験を基盤とするイメージ・スキーマによって動機づけられていると述べている。その典型例としては、〈上・下〉スキーマ、〈容器〉スキーマ、〈部分・全体〉スキーマなどが挙げられる。また、イメージ・スキーマはメタファーによる投射は概念メタファーを形成する基盤となっている(鍋島2011)。

Yu(2003)は日英〈思考〉メタファーを比べ、中国語において〈THINKING IS MOVING〉〈THINKING IS SEEING〉の2つの概念メタファーを挙げ、空間移動と視覚感知という身体経験が〈思考〉メタファーに根ざされていると述べられている。中国語では、考えを行う場所が“脳(脳)”や“心(心)”であることを指摘している。また、図6のように体を容器として捉え、考えが容器を出入りする事で、考えを知覚することを考える場合、〈起点-経路-終点〉スキーマ、〈容器〉スキーマはこの二つの概念メタファーを支えていると述べている。

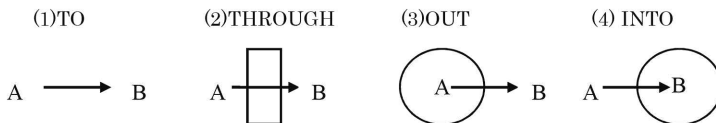


図6 <思考メタファー>のイメージ・スキーマ(Yu2009:106)

Yu(1995, 2009)は、英語と中国語に存在する〈怒り〉のメタファー表現を比較し、中国語は英語より身体部位を言語化する傾向にあることを指摘している。また、韓(2014)では、中国語における〈身体部位は様々な抽象物を入れる容器〉を例に取って、思考、感情、言葉と身体部位の関係を論じている。その結果、中国語では〈身体部位は感情を入れる容器〉〈身体部位は考えを入れる容器〉〈心は考えを入れる容器〉〈頭は考えを入れる容器〉〈身体部位は言葉を入れる容器〉〈身体部位は記憶を入れる容器〉といった概念メタファーがあることがわかった。さらに、〈身体部位は言葉を入れる容器〉に関して、中国語は英語や日本語に比べて、〈身体部位は容器〉というメタファーに依存する度合いが大きい(中国語>日本語>英語)と述べられている。

韓(2014)を踏まえて、日中両言語はどちらが〈身体部位は容器〉というメタファーに依存する度合いが大きいかを量的に検証するために、コーパスで思考を表す名詞「考え」と身体部位「頭」、「心」の共起頻度を調べる。その結果、BCCWJのコアデータから「考え」を含む文 9468 例のうち、同じ文の中で「頭」と共起する文 175 例、全体の 1.85%を占め、「心」と共起する文 38 例、全体の 0.40%を占めることが明らかになった。一方、中国語のコーパスから思考を表す名詞「念头(考え)」と身体部位「脳(脳)」、「心(心)」の共起頻度を調べる。その結果、CNC から「念头(考え)」を含む文 179 例のうち、同じ文の中で「脳(脳)」と共起する文は 32 例、全体の 17.87%を占め、「心(心)」と共起する文は 17 例、全体の 9.49%を占めることがわかった。いずれも日本語より中国語の方が考えと身体部位との共起頻度が高い。つまり、中国語では、考えを知覚する時、考えが脳や心に現れ、脳や心をよぎるなどのように、身体部位を言語化する習慣がある。〈身体部位は容器〉というメタファーに依存する度合いが大きいため、〈容器〉スキーマによって動機付けられ、「深」の使用が好まれていることがわかる。それについては、学習者の自由産出文からも同じ傾向が見られる。4.3.1の図2では、学習者が産出している文の中で、「深い」と前後5語の共起名詞を調べた結果、「心」は20例ある。

一方、日本語においては、野村(2002)、鍋島(2011)、鈴木(2011)では、日本語の感情、言葉のメタファー表現を分析し、〈感情は液体〉〈言葉は液体〉といった概念メタファーがあると論じられている。後藤(2016)では、日本語の感情名詞(勇気、不満、怒りなど)と放出动詞(噴出する、溢れる、滲む、湧く)の対応関係から、〈力〉スキーマは〈感情は液体〉メタファー表現の分布を決定づける中心的な動機付け・制約として機能すると述べられている。日本語では、「勇気が湧く」「不満が噴出する」など、体を容器としており、感情はその容器の中の内容物である。発生源から勢いを持つ内容物の移動を「強い」と捉え、〈力〉スキーマによって動機付けられ、「強い」の使用が好まれている。

中国語と日本語は、同じく〈体は容器〉という身体性に基づく概念メタファーで、思考と感情の状態を表している。中国語では、〈身体部位は容器〉というメタファーに依存する度合いが大きいのに対して、日本語では、容器の中の内容物の状態に焦点を当てている。そのため、中国語では、思考、感情の強さを表す時、「深」が用いられるが、日本語では、「強い」が用いられる。日中両言語におけるイメージ・スキーマの異同は学習者の誤用(直訳、非直訳)を引き起こす要因である。

6. まとめ

本研究は大型学習者コーパスのデータを利用し、語共起の情報に基づき、中国人日本語学習者の形容詞コロケーションの誤用の実態と原因を探った。その結果、以下の4点が明らかになった。

- ① 中国語話者、韓国語話者、英語話者の学習者は日本語母語話者の自然産出のデータと同じ傾向を示す。また、形容詞「強い」「深い」「高い」「大きい」の産出量は他の形容詞より多い。
- ② χ^2 検定の結果により、中国語を母語とする日本語学習者が産出する形容詞「深い」「小さい」の頻度は日本語母語話者、韓国、英語を母語とする学習者と比べて、実質的な差があることが分かった。
- ③ 日本語母語話者の修正データに関しては、共起によるコロケーションの誤用が見られる。「深い」の誤用の68%は「強い」に修正され、「小さい」の誤用の81%は「小さな」に修正されている。この結果から、中国人日本語学習者が「深い」と「強い」の拡張義を混同して使用していることが分かった。また、品詞レベルでは、形容詞「小さい」と連体詞「小さな」の使用を混同していることが分かった。
- ④ 「深い」「強い」と思考、感情を表す名詞との共起関係を調べたところ、日本語では「強い」の使用が好まれるのに対して、中国語では“深”の使用が好まれるということが明らかになった。その原因は<思考><感情>メタファーに関して、日本語では、<力>スキーマによって動機づけられているが、中国語では、<容器>スキーマによって動機付けられているからである。

本研究では、中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態を明らかにし、誤用の原因は、母語の直訳によるものではなく、日中間のイメージ・スキーマのズレが誤用の原因であると論じた。

また、本研究は学習者の自然産出に現れるコロケーションの誤用を分析するために、Lang-8 学習者コーパスを利用している。Lang-8 学習者コーパスでは学習者が産出した文数が多いため、ある概念メタファーによって動機付けられている学習者の自然産出したコロケーションの研究には相応しい。しかし、コーパスのデザインによって、学習者の学習歴、日本語レベルが不明である。そのため、母語と日本語のイメージ・スキーマのズレはどのレベルの学習者にどのように影響しているのか説明がつかない。これは本稿の限界だと言える。今後の課題として、学習者の日本語レベルを統一し、学習者のレベルとイメージ・スキーマの転移の関係を検討する。

注

- (1) マンダリンを母語とする中国語話者を指す。
- (2) Lang-8 学習者コーパスにおいて、産出する文数は、学習者の母語が、英語>中国語(マンダリン)>繁体中国

語>韓国語の順が多い。本研究は異なる言語体系の言語を母語とする学習者の異同を調べるために、繁体中国語を除いて、産出文数が最も多い英語及び韓国語を母語とする学習者の産出データを分析対象とする。

引用文献

- Boers, F. (2000). Metaphor awareness and vocabulary retention. *Applied Linguistics*, 21(4), 553-571.
- 曹紅荃・仁科喜久子(2006a)「中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言:名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について」(特集コーパスと日本語教育:現状と課題)『日本語教育』, 130, 70-79.
- 曹紅荃・仁科喜久子(2006b)「自由産出調査から見る形容詞および形容動詞と名詞の共起表現:学習者と母語話者の対照を通して(特集言語の学習・教育)」『電子情報通信学会技術研究報告.TL, 思考と言語』, 106, 31-36.
- 曹紅荃・仁科喜久子(2007)「容認性判断テストの結果から見る中国人日本語学習者の共起表現受容時のL1 転移」『日本語教育方法研究会誌』, 4, 216-217.
- Corder, S. P. (1967). The significance of learner's errors. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 5(1-4), 161-170.
- Dulay, H. C., & Marina K. B. (1972). Goofing: an indicator of children's second language learning strategies. *Language Learning*, 22(2), 235-252.
- 後藤秀貴(2016)「<感情は液体>メタファー表現の成立基盤と制約:概念メタファー理論の「まだら問題」をめぐる」(日本語用論学会メタファー研究会) 口頭発表(2016年7月)
- 韓濤(2014)『中国語の概念メタファーに関する研究:認知メタファー理論の立場から』名古屋大学博士学位論文.
- 小森和子・三國純子・徐一平(2012)「中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得:中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較」『小出記念日本語教育研究会論文集』, 20, 49-61.
- Lado, R. (1957). *Linguistics across cultures*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). The metaphorical structure of the human conceptual system. *Cognitive Science*, 4(2), 195-208.
- Liu, D. (2010). Going beyond patterns: involving cognitive analysis in the learning of collocations. *TESOL Quarterly*, 44(1), 4-30.
- 李文平(2016)「中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究:作文データに基づく『名詞+を+動詞』のコロケーションを中心に」名古屋大学博士学位論文.
- McCawley, J. D. (1968). The role of semantics in a grammar. In E. Bach & R. T. Harms

- (Eds.), *Universals in linguistic theory* (pp.124-169). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 三好裕子(2007)「連語による語彙指導の有効性の検討」『日本語教育』, 134, 80-89.
- 水本智也・小町守・永田昌明・松本裕治(2013)「日本語学習者の作文自動誤り訂正のための語学学習 SNS の添削ログからの知識獲得」『人工知能学会論文誌』, 28(5), 420-32.
- 鍋島弘治朗(編著)(2011)『日本語のメタファー』東京:くろしお出版.
- 中村嘉宏(2011)「語彙習得の諸相」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』, 15(2), 35-54.
- 野村益寛(2002)「〈液体〉としての言葉:日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐる」大堀壽夫(編)『認知言語学 II:カテゴリー化』(東京大学出版会), 37-57.
- 大関浩美(2017)「学習者コーパスと第二言語習得:コーパスを使ってできること・できないこと」(第二回学習者コーパスワークショップ) 口頭発表(2017年3月)
- 迫田久美子(1998)『中間言語研究:日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』広島:溪水社.
- Schachter, J. (1974). An error in error analysis. *language learning*, 24(2), 205-214.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10(1-4), 209-232.
- 鈴木幸平(2011)「コーパスに基づく日英語の液体メタファー比較」『日本認知言語学会論文集』, 11, 38-48.
- 竹内理・水本篤(2012)(編著)『外国語教育研究ハンドブック:研究手法のより良い理解のために』東京:松柏社.
- 山梨正明(2000)(編著)『認知言語学原理』東京:くろしお出版.
- Yu, N. (1995). Metaphorical expressions of anger and happiness in English and Chinese. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(2), 59-92.
- Yu, N. (2009). *The Chinese heart in a cognitive perspective: culture, body, and language*. Applications of Cognitive Linguistics, 12. Berlin: Mouton de Gruyter.